

「破門」の重み

カンパニア州ではマフィア絡みの事件が次から次へと起きていく。特にシチリア、レッジョ・カラブリア、ナポリの3地域は、イタリアの悪の温床と言われ、組織的犯罪は良く知られている。一括してマフィア組織と呼ばれているが、実際にはこの3地域で呼び名が異なっている。シチリアでは「マフィア」、レッジョ・カラブリアでは「ンドランゲータ」、ナポリでは「カモーラ」と呼ばれている。6月21日、ローマ法王フランチェスコは、南のレッジョ・カラブリア州のカッサーノ・アロ・イオニオ（コセンツァ）に乗り込み、25万人以上の信者が集った野外ミサの席上でマフィア（ここではマフィアと統一）組織を糾弾した。当地の訪問の第一の理由は、今年1月20日マフィアによって焼き殺された3歳の子、ココー・カンポロンゴの霊を慰めるためだった。

法王は「日常生活で悪を奉じるもの、つまりマフィアは、神と思想的に一致することはない。彼ら全員は破門だ。」と糾弾した。このように激しい言葉をマフィアに投げかけた法王は今までにいなかった。前前法王のヨハネ・パオロ2世はマフィアに改宗を迫り、「最後の審判に備えよ。」といった。一方、前法王ベネディクト16世は「マフィアは死の道である。福音は許されない。」と言っている。現法王はさらに「主を尊敬できないものは悪の尊厳者である。」と言い、「教会は意識の教育に取り組んでいる。これは善が世界を支配するためである。」と続けた。

今までのローマ法王の「破門法」の適用は政治的なものであって、今回のような「宗教的」ものではなかった。いくつかの例を記してみよう。中世の神聖ローマ帝国（ドイツ）皇帝ヘンリー4世、フェデリコ2世、エリザベス1世、イタリア王ヴォットリオ・エマヌエル2世、そして全ての住人を含んだヴェネツィア共和国だ。

教会とマフィア

今までのこの3地方の「悪」と「教会」は持ちつ持たれつという関係が続いていたところもある。この3地方の悪の大物たちはよく教会に行き、祈り、マドンナの絵をポケットに入れていた。また、悪の世界には「マフィアの聖書」というものがある。「教会とマフィア」「マフィアと教会」と言われるように、どちらが主で、どちらが従なのか、甲乙付け難い存在となっていた。その境界は長い間分らなかった。

毎年9月2日「ンドランゲータ」の幹部会が、南の山アスプロモンテの標高865メートルの谷間のボルシの聖母マリア教会で行われる。そこで、その年度の戦略を決定し、犯罪を促し、同盟関係を強化する。さらに、「ンドランゲータ」の12の信条を表した表を堅持する。

「マフィアとは一体何だ？」という問いに、パレルモの大司教だったエルネスト・ルッフィーニは「チーズの商品名」だと答えている。彼はマフィアとして知られたボスにも祝福を授けていた。また同様の問いに、教会の幹部は「共産主義者の発明である」と明言していた。

1951年ローマ近郊のヴィテルボで開かれたボルテラ・デラ・ジネストラの悲劇の裁判が行われていたが、ガスパーラ・ピッシェッタは「世界の出来事はすべて三位一体的で我々は一つである。悪党、警察、マフィアは神、子、聖霊の三位一体の

ようなものである。」と言っていた。「マフィアの神は存在するのか？」という問いには「存在する。それは悪の神だ。善いことを悪い事に変える神なのだ。」と答えている。

マフィアに塗れた神父は沢山いる。例えば、ニット・サンタペーラはサレジオ大学で勉強した。彼の家族は彼が聖職者になることを望んでいた。カロージェロ・ヴィッツイーには、戦後マフィア僧侶になったし、2人の叔父は司祭になっているし、2人の兄弟のうち、一人は神父であり、もう一人は教区司祭である。ピエトロ・アリエーリの妹は尼であり、彼が逃げ隠れていたところには、キリストの祭壇があり、彼はそこで何時も祈っていた。

聖母マリアの像をかついでる行進

7月6日にマフィア関連の出来事があったが、その二つを記そう。

一つ目は、レッジョ・カラブリア州のオビド・マメルティーナでは、恩寵の聖母マリア像の神輿を引く行列が街の中を進んでいた。その行列が突如止まったのである。そこはマフィアのボス、ペペ・マツァガッティの住居の前だった。彼は裁判で終身刑の罪を受けているのだが、健康上の理由で自宅監禁となっている。マリア像は彼の家の入り口の方に向けられた。行進が止まり、ボスの家の方向に像を向け、ボスに祝福を行ったということが、大なる論争を呼んだ。これはマフィアと教会がいかに強い「繋がり」を持っているかと言う証である。その行進をリードした神父は「像はボスに頭を下げたが、聖母マリアはしていない。」と主張している。

二つ目は、イタリア南東部のモリーゼ州のラーイーノでの出来事である。その町には刑務所があり、多くのマフィア関係の人が収容されている。キリスト教では神父たちが刑務所を訪問、あるいは専属の神父が、囚人の更正を願って説教をしている。毎日曜日にはミサも開かれている。それが7月6日のミサには100人余りの収容者は参加しなかった。ローマ法王の言葉に反抗して、ストライキをしたというのである。

イスラエルとパレスチナの平和交渉にヴァチカンを提供

5月の末巡礼の使徒として、ヨルダン、イスラエル、パレスチナと回った法王は、イスラエルのペレス、パレスチナのアブ・マゼンに平和の確立交渉に、ヴァチカンの自分の家、庭を提供することを確約した。6月8日、ペレスとアブ・マゼンはヴァチカンを訪れた。さらに正教の代表者として、イスタンブールの大司教バルトメオ1世も参加した。一行は法王の住居マルタ宮殿に集まり、それぞれの信条に基づいて祈りの時間がもたれた。そのあとマイクロバスに同乗して、ヴァチカンの庭に集合。4人はジャーナリストの問いに答えていた。その後、4人で共同して「平和の木・オリーブ」を植樹した。こう見ると結構尽くめだが、6月の末に事件が起きた。イスラエルの若者3人が、パレスチナ人に捉えられ、殺されたのである。街は騒然となり、イスラエル側は、報復としてアラブの15歳の子を捕らえ、痛めつけ、生きたまま火を付けて焼き殺してしまった。

上層部の平和交渉は行われるが、一般民衆の心の中の「わだかまり」は一朝一夕で消えることはないようだ。そこに対話の難しさがある。